http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第２１４５号）

指導資料　社 会　第139号

鹿児島県総合教育センター
令和５年４月発行

対象校種：中学校　義務教育学校　特別支援学校

単元を見通して構想する授業デザイン
－問いの設定を中心にして－

◆　単元を見通した授業デザインは，資質・能力を育む社会科授業づくりの基盤である。
◆　単元を見通した授業デザインに当たっては，単元を貫く問いを設定し，その追究を通して，生徒自身の問いが継続するように構想することが重要である。
＃単元を見通した授業デザイン　＃単元を貫く問い　＃問いの設定

１　はじめに

中学校学習指導要領は，社会科の指導計画の作成に当たって，「単元など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」[1)]と示している。このことから，生徒の資質・能力を育成するために，単元を見通した授業の着実な実践が重要であることが分かる。しかし，数々の学習指導案を読むと，１単位時間の授業が単発的に展開され，単元の意識が希薄であると推測されるものも見受けられる。単元を意識せず，教科書の内容を順序よく取り扱う授業では，資質・能力を育むための主体的・対話的で深い学びの実現は困難である。このことを踏まえ，本稿では，単元を見通して構想する授業デザインの在り方について，問いの設定を中心に述べる。

２　単元を見通した学び

単元とは学習内容や学習活動のまとまりを指す概念で，授業者の意図によって設定される。その設定において，学習指導要領の大項目を構成する中項目や小項目をそのまま一つの単元に充てる場合でも，授業者は，生徒の実態等を踏まえ，学習内容や学習活動のまとまりを十分に考慮する必要がある。

例：地理的分野 大項目Ｂ「世界の様々な地域」
(1)　世界各地の人々の生活と環境
(2)　世界の諸地域
　① アジア　② ヨーロッパ　③ アフリカ
　④ 北アメリカ　⑤ 南アメリカ　⑥ オセアニア
　※　(1)・(2)は中項目，①～⑥は小項目

また，生徒の主体的・対話的で深い学びは，課題解決的な学習における課題把握から課題追究，課題解決へ進む一連の学習過程を通して実現を目指すものである。課題解決的な学習は，生徒が「どのように学んだか」を大切にして展開することから，授業デザインにおいて，生徒の学びを促す問い（学習課題，発問）の検討が欠かせない。原田智仁氏が「授業で生徒の思考を促そうとするのであれば，生徒自身に問いを自覚させることが何より重要になる。（中略）教師の問いを受け止め，その問いの意味を理解・納得し，生徒自身が自らに問いかけてこそ思考は生まれる」[2)]と述べているように，教師は，単元の学習を方

向付ける問い（学習課題）や，その問いを解決するための具体的な問い（発問）を構造的に配置し，生徒の問い（疑問）が継続する単元全体のつながりをデザインしたい。

３　単元を貫く問いの設定

単元の学習を方向付け，単元を通して生徒に意識させたい課題が単元を貫く問いである。この問いは，単元の導入段階で設定し，各単位時間の学習課題に対する答えを総合して解決を図る問いとして位置付けられる**（図１）**。

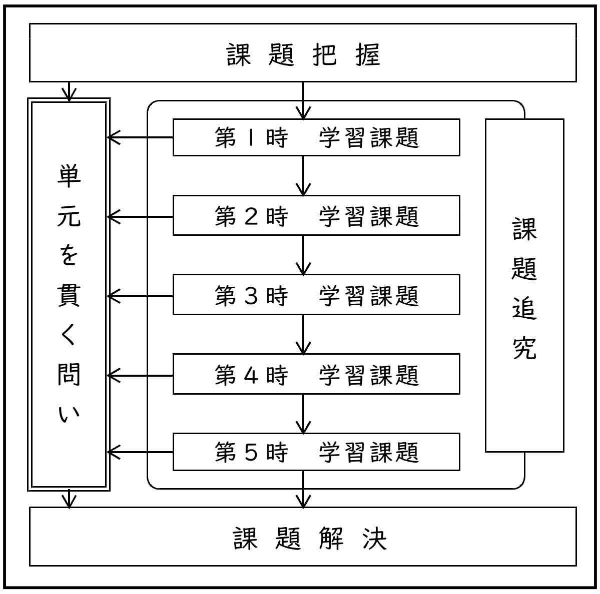

図１　単元を貫く問いを位置付けた単元構成例

（※　５時間計画の場合）

さらに，単元を貫く問いは，その追究を通して，単元のねらいとする資質・能力の育成を図るために，「社会的な見方・考え方」（指導資料：社会第130号，第132号参照）を働かせることのできる問いであることがポイントになる。

> 「社会的な見方・考え方」を働かせる問いの設定
>
> 単元など内容や時間のまとまりを見通した「問い」を設定し，「社会的な見方・考え方」を働かせることで，社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連等を考察したり，社会に見られる課題を把握してその解決に向けて構想したりする学習を一層充実させることが求められる。[3]
>
> （下線は筆者による）

「社会的な見方・考え方」を働かせる際に着目する視点については，学習指導要領「各分野の目標及び内容」の中項目に，「～などに着目して」のように明記されている。例えば，地理的分野の中項目「世界各地の人々の生活と環境」については，次のように示されている。

> (1)　世界各地の人々の生活と環境
>
> 場所や人間と自然環境との相互依存関係などに着目して，課題を追究したり解決したりする活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。[4]　（下線は筆者による）

この中項目を単元として指導計画を作成する場合，「社会的な見方・考え方」を働かせる際に着目する視点は「場所」，「人間と自然環境との相互依存関係」などである。これらを念頭に置いて，単元の学習内容を具体的に選定し，各単位時間を通して身に付ける知識及び技能を活用して解決する単元を貫く問いを設定する。例えば，「なぜ，世界各地では，人々の生活に様々な特色が見られるのだろうか。また，なぜ，それは変容しているのだろうか。」などの問いを設定することができる。

このように，単元を貫く問いを設定することで，授業者は単元を構成する各単位時間を有機的に関連付け，一貫性のある指導を展開できる。一方，生徒は単元を通して，「何が分かればよいか」，「どのようにまとめればよいか」を意識しながら計画的に学びを進めることができる。ただし，時間が経過すると，学習の連続性に係る意識が希薄になりやすいため，指導に当たっては，単元における本時の位置付けや次時以降の見通しを明確に把握できるような手立てを講じたい。

そして，今後，「個別最適な学び」の実現に向けて，各生徒が自分の興味・関心を基に，学ぶ教材や調べる方法等を決める機会が拡充するほど，学びの方向性を示す単元を貫く問いの重要性は高まると考える。

４　各単位時間における問いの設定

単元を構成する各単位時間の学習課題は，単元を貫く問いを解決するために設定される問いである。また，各単位時間には，学習課題を解決するための下位の問いが必要になる。

各単位時間の学習課題や，その下位の問いは，単元の学習内容を具体的に選定する過程で検討されることが多いだろう。一般的には，まず，教科書を使用した教材研究が行われていると想定される。教材研究として教科書を読むに当たっては，「どのような記述や資料があり，それらを生かして，どのような問いを作ることができるか。」という視点を大切にしたい。教科書等から抽出した問いを精選し，単元を貫く問いとの関連を考えて構造化を図ることで，単元を見通した授業デザインは明確になる。

では，教科書を使って，どのように問いを抽出すればよいだろうか。例えば，地理的分野の単元「アジア州」の「中国の経済発展」に関する記述は次のような内容になっている。

「中国の経済発展」に関する教科書記述の例

① 1970年代末まで，中国の農工業は政府の計画に基づく生産が行われたが，大きな成長につながらなかった。
② 中国は，1980年代から改革を進め，シェンチェンなどに経済特区を設けた。
③ また，シャンハイなどに，外国企業と共同経営する工場を建設した。
④ 中国は，外国企業の進出を積極的に受け入れた。
⑤ 豊富な人口（労働力）を生かして工業製品を大量生産した。
⑥ 中国は，工業輸出国として，急成長を遂げた。そして，「世界の工場」と呼ばれるようになった。

教科書の多くは上記の他に，経済発展による課題（沿岸部と内陸部との経済格差，環境問題の進行など）を取り上げている。これらの内容を，単元の構成を考慮しながら検討し，本時の学習課題を「なぜ，中国は『世界の工場』と呼ばれるようになったのだろうか。また，どのような課題が見られるだろうか。」と設定する。

①～⑥は，「なぜ，中国は『世界の工場』と呼ばれるようになったのだろうか。」の問いに対応する内容であり，「『世界の工場』と呼ばれるようになった」という結果につながる原因が述べられている（**図２**）。

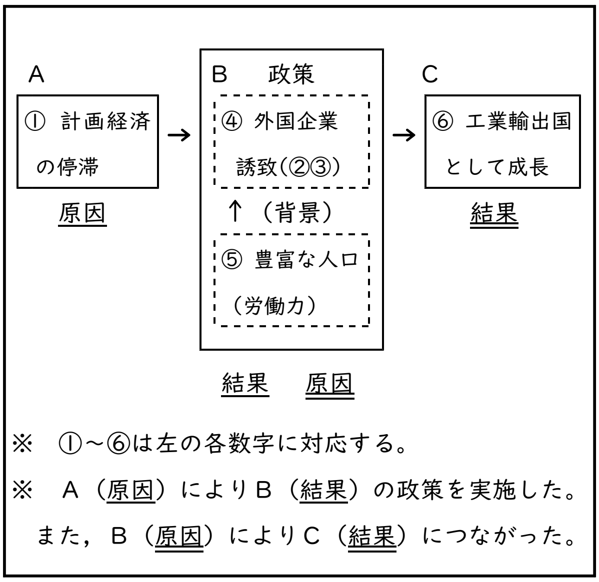

図２　「中国の経済発展」に関する教科書記述の分析

図２を参考にして，原因と結果の関係などに着目すると，次のような下位の問いを抽出することができる。

○　中国はなぜ，工業輸出国として成長することができたのだろうか。
○　中国は外国企業の受け入れをどのように進めたのだろうか。
○　経済特区とは何だろうか。中国のどこにあるのだろうか。
○　中国はなぜ，外国企業を積極的に受け入れたのだろうか。また，多くの企業を受け入れることができた理由は何だろうか。

以上，教科書記述から問いを抽出する一例を示した。抽出後は，各問いを関連付け，構造的に整理しながら，最終的に採用するものを確定していく。なお，問いの設定に当たっては，問いを考察するための学習活動と，答えの根拠となる資料をセットで検討することが必要になる。

5　実践例

本稿で述べた考え方を基に構想，実践した単元の指導計画（一部）を示す（**図３**）。事例は，地理的分野「近畿地方」について，単元を貫く問い「近畿地方では，なぜ都市や農村の姿が変化してきたのだろうか。」を設定し，各単位時間の学習を通して，その解決を図る構成としている。また，近畿地方における課題や取組事例を参考として，身近な地域の課題とその対応策を考察する学習活動を位置付け，その成果を次の単元「地域の在り方」において活用できるように，単元相互の関連を図る工夫をしている。

時	主な学習活動	生徒の思考の流れ
1	・　近畿地方の自然，人口，気候について，雨温図や地形図等の資料から概観する。 近畿地方を広くながめると，どのような特色がみられるか。 ・　単元を貫く問いを設定する。 近畿地方では，なぜ都市や農村の姿が変化してきたのだろうか。	・　北部，中央平野，南部で自然環境に特色がある。 ・　中央平野に人口が集中している。 ・　市町村によって人口の増減があるのはどうしてだろう。
2	近畿地方では，都市はどのように形成され，どのような課題があるか。 ・　都市部の成り立ちについて，資料を基に理解する。 ・　大阪湾臨海部の工業の特色を捉え，大都市における工業の課題を考察する。	・　都市と郊外が結び付いて，大都市圏が形成された。 ・　都市圏では住宅地が拡大し，交通網が発達した。 ・　1960年と比べて，2015年は機械・化学工業の割合が増えている。また，生産額も大幅に増加している。 ・　町工場と住民が共存するため，騒音等の問題解決に取り組んでいる。
3	近畿地方の都市にはどのような課題があり，どのような取組が行われているか。 ・　都市の発展や，開発と課題について，地図や写真等を基に理解する。 ・　京都市を事例に，歴史的な景観の保存と開発の在り方について考察する。	・　平地が狭い神戸市では，山地を削ってニュータウンを建設したり，海を埋め立て，人工島を建設したりした。 ・　大阪府では，老朽化の進行するニュータウンの活性化に向けた福祉の充実を図っている。 ・　京都市では，条例を制定し，歴史的景観を保全し，調和を考えた町づくりをしている。
4	なぜ，都市部以外の地域では人口が減少しているのか。また，人口減少に対してどのような取組をしているか。 ・　市町村別人口増減率の地図を基に，過疎地域の分布の特色を理解する。 ・　過疎化の原因と改善に向けた取組について，身近な地域と関連付けて考察する。	・　都市から60kmほどしか離れていないのに，急激に人口減少が進んでいる地域がある。 ・　山間部を中心に過疎化が進行している。 ・　山間部にある地域では，自然を生かした村づくりに取り組んでおり，地域の活性化を図っている。 ・　屋久島町ではどうだろう。 ・　屋久島町においても，地域活性化に向けた取組を充実させることが必要だ。何ができるだろう。
5	単元を貫く問いについてまとめよう。 ・　都市・村落とその成立条件を，地域の広がりや結び付き等に着目して，都市や農村の姿が変化してきた理由を考察する。 ・　白地図を使って，近畿地方の特色をまとめる。 ・　単元の学習の振り返りを行う。	（単元を貫く問いに対するまとめの例） 近畿地方では，高度経済成長などの社会の変化に伴い，都市部や農村部の人口構成が変化し，諸課題が生じた。しかし，都市の再開発や農村での村おこしなどの課題解決に向けた取組によって，新たな変化が見られる。

（屋久島町立中央中学校　上ノ町　亮一 教諭の実践を基に作成）

図３　単元「近畿地方」の指導計画（一部）

6　終わりに

これまで述べたように，単元を見通して生徒の問いが継続する授業をデザインすることで，資質・能力を育む主体的・対話的で深い学びにつながると考える。実際の授業では生徒の問いを生かして，柔軟に展開したい。

－引用文献－

1)4) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』平成29年，東山書房

2) 原田智仁『中学校 新学習指導要領　社会の授業づくり』平成30年，明治図書出版

3) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』平成29年，東洋館出版社

（教科教育研修課　塩満 貞徳）

※　本資料は，UDフォントを使用しています。